動乱の時代だった
私の幼・少・青年期

春日丘支部　下川秋雄

私は大正八年生まれですから、今年七十三歳になります。生まれる前年のシベリア出兵・米騒動に始まって、関東大震災・治安維持法の公布・金融恐慌・満州事変勃発・上海事件・五・一五事件・国際連盟脱退・二・二六事件そして盧溝橋事件から突入していった日中戦争…とまさに動乱の時代に生を受け、幼・少・青年期を過ごしたのです。いわゆる軍国教育を、骨の髄までたたき込まれた世代なのです。男子としてお国のため、天皇陛下の御ために死ぬることを本懐として、死に場所を得るために人となりとなったようなものです。今の若い人には決して理解してもらえないでしょう。

徴兵検査に合格して召集を受け、フィリピンへ行っていましたが、ほんの僅かな期間で昭和十七年の四月に帰国しましたから、戦闘の場面に遭遇することもなく、銃弾の一発も撃つこともなかったのです。あの動乱の時代を生きた日本人として、命の危機に瀕したことがなかったというのは、幸運以外の何ものでもありません。そんな私の少しばかりの戦争体験をお話してみましょう。

私の生家は大阪市住吉区、住吉神社の近所にありました。九人兄弟の八番目、六男として、それは賑やかな家庭に育ちました。

昭和十六年四月一日、馬場町にあった第二十三部隊に入隊しました。その当時、家には父母も健在、長男は兵役の二年満期で平壌から帰ってきていました。三男はフィリピンへ出征していました。（この兄は昭和十七年末に戦死しました）。

入隊して三ヶ月間和泉の信田山練兵場で訓練を受け、八月末大阪港から中支に向かいました。大きな貨物船に、第四師団の補充要員として、初年兵ばかりが一万名ほども乗っていました。当時戦時体制にはなっていませんが、戦雲急というのか、日本を取り巻く世界の状況は不穏でしたから、生きて故国の土は踏めないかもしれないという危惧を誰もが感じていました。上海に着いた時には一等兵になっていたのではないかと思いますが…。その上海から武漢まで二昼夜の汽車の旅です。勿論汽車といっても貨車ですが、ゆけどもゆけども同じ風景がつづく大中国の平野をただ走りに走りました。その武漢では百五十人位で編成されている矢野中隊の一員として、軍事訓練をしながら待機しました。

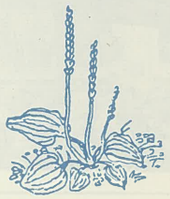
そして昭和十六年の十月、第四師団は全部隊上海に集結し、フィリピンに向け出港しました。年が明けてリンガエンという海岸に上陸し、そこからマニラまで中隊ごとに夜間に行軍しました。いや最終行程は菊水部隊（自動車部隊）の車に乗ったのでした。その頃に日本軍による真珠湾奇襲・第二次世界大戦への突入の報を聞きました。私達は全員「くるべきものがきた！」と興奮したことを覚えています。バタン島という所に落ち着いたのですが、そこで中隊長以下全員が次々にマラリアにかかったのです。四十度の高熱が続き、全く死ぬ思いの何週間かを過ごしました。体力に自信がありましたし、実際マラリアで死ぬことはありませんでしたが……その後コレヒドル島という小さな島に上陸し、六月に第四師団に帰国命令が出て、全員無事大阪港に帰ることができました。最終階級兵長下士適任でした。結局干戈を交えたということも、住民に被害を及ぼしたということも全くありませんでした。食糧も本土から運んできましたし、現地調達ということはありませんでした。ただ住民がさとうきびの汁で作った黒砂糖を私達に売りにくるので、日本製の煙草『誉れ』で物物交換をしました。私達は皆、甘いものに極端に飢えていたので、楽しみでしたね。

帰国後、第二三部隊は再度召集を受けましたが、私はただひとり、教育係として初年兵の教育に携わることになりました。しかしあのマラリヤの菌は頑固で、三ヶ月おいて二度入院し、やっと完治したのです。その病院は堺市の金岡にあって、多分、現在の国立療養所近畿中央病院ではないかと思うのですが、まちがっているかもしれません。

教育係は十九年十二月、満期除隊になるまで務めました。その少し前に結婚しやはり住吉区に住み、召集前の勤務先にもどって一市民の生活をしていました。二十年の三月

写真で見る⑪
15年戦争と戦後

1943年9月　上野動物園の人気者の象「トンキー」も戦争の犠牲に。



の大阪大空襲の際、我が家の裏庭に焼夷弾が突き刺さり、くすぼっているのをだき抱えて裏の畑に放り投げたことがありました。その時は夢中でしたが、あんなことがよくできたものだと、自分でも驚いたものです。

昨今、PKO派遣の合法化を目的に、憲法改訂の必要ありという声がきかれます。世界に誇る『平和憲法』を改悪するなんてとんでもありません。大きな被害と引き換えに獲得した人類が持ち得る最上の財産です。日本国民を戦争に駆り立てた軍国教育が、どんなに愚かで恐ろしいものかを、私達の年代の者は身をもって知っています。平和の尊さを骨身にしみて知っています。私達の味わったあの暗い半生を、可愛い孫達に二度と経験させたくありません。

（聞き書き）

大八車に乗って

富田林東支部　吉岡房子

「あっ！兄ちゃんの顔、まっ黒けや！」「そう言う房ちゃんの顔も、まっ黒けやで」と笑いながら話している母の顔も、隣りの座席に座っている祖母の顔も、トンネルを抜けた時に汽車の煤で、まっ黒になっていた。

学童疎開か縁故疎開かと迷っていた祖母が、子供達（兄九才、私七才）だけで疎開さす学童疎開には踏み切れず、初めは学童疎開児として校庭に並んでいた兄を、無理矢理、引っ張る様にして祖母が家に連れ帰ったと、後に兄から聞かされた。それから間もなく、祖父の実家である滋賀県へ、祖母と私と兄が疎開することになった。（昭和二十年三月も末のことである。）

写真で見る 15年戦争と戦後 ⑫

疎開する学童（上野駅で）

戦局の悪化にともない大都市の国民学校初等課児童を個人的、または集団的に疎開させました。父母と別れて暮らす淋しさや空腹。戦争は子供たちをも大きく犠牲にしました。

煤だらけの顔をしながら、草津の駅に着き改札を出ると、大きな大八車を引っ張っている女の人が立っていた。父の従兄弟の嫁、お文さんだった。私は初対面であったが、何か親しみの持てるおばさんだった。私達の手に持っている荷物を取って、さっさと大八車に乗せて、「正ちゃんも、房ちゃんも大八車に乗り！疲れてるやろ！」と私の手を取り、急いで乗せてくれた。母と祖母は、お文さんと久し振りにあった懐かしさからか、楽しそうに話ながら、大八車の後を押しながら歩いていた。大八車に乗った私は、ガタガタの道にゆられ何度も落ちそうになり乍ら、大八車にしがみついていた。草津の競馬場の土堤を通り越し、春の草花がそろそろ芽を出し始め、三月も間もなく過ぎようとする、春浅い日の夕方、三里程の道程を滋賀県栗太郡宇野尻へと急いだ。父は召集を受けて舞鶴に行ってしまっていたので、見送りがてら滋賀県迄、一緒に来た母と私達兄妹、祖母が揃って大阪へ帰れる日はいつになるのか。それぞれの当時の想いは今だに解らない。が、まさか、この四人の内の一人が、終戦後、二度と大阪の土が踏めないことになるとは、その時誰も想像しなかっただろう！。

「この子等、大阪から疎開して来たんよ。仲ようしてやってね」と云いながら、集団登校する為に集まっている子供達に、いつのまに用意していたのか、男の子には、紙飛行機を、女の子には、千代紙を母は手渡していた。戦時中の物のない時分の事である。どうして手に入れる事が出来たのか。その後、聞き正す事は二度と出来なかったが……。昭和二十年四月滋賀県栗太郡大宝国民学校へ、私と兄が、大阪から疎開の為、祖父の実家のある滋賀県へ転校して来た時の事である。

「加藤の本家の所に来た子やろ。越して来た日から知っとるわ」母からもらった紙飛行機を飛ばしながら、最初に話しかけてくれたのが、一番ごんたそうな加藤武と云う男の子だった。（その子も祖父の親戚筋にあたり、その村の三分の一は、加藤の姓である。）それから後も何かにつけて話しかけてくれるのだが、何か私の気にさわる様な事を云っては、からかってばかりいた。本当はきっと、気持ちのやさしい子だったのかも知れないが。

私達が疎開してきた野尻の村から、学校迄の一里程の道程は、見わたす限り田んぼで、あぜ道には、れんげ草が咲き乱れていた。道中、れんげ草を摘んで、それを輪にして、